

青森南部から宮城北部までの三陸海岸の沖合はカヤックで何度も往復してきた関係で、地域にはカヤック仲間というべき友人が多数存在し、当然であるが、被災した友人も少数ではない。そこで現地を見舞いに訪問し、そのとき各地の被害の状況を見学した。専門に調査をしたわけではないので、マスメディアの報道以上の知見はほとんどないが、興味あることに気付いた。

岩手県宮古市の北部にある田老地区は、慶長、明治、昭和の三陸津波のとき、毎回壊滅状態になった漁村であり、昭和三陸津波の直後から田老の万里の長城と揶揄されるほどの壮大な堤防を構築したことで有名である。チリ地震津波のときには見事に津波を遮断して世界に勇名が喧伝されたが、今回は堤防の2倍の高度の津波にまったく対抗できず、堤防も一部崩壊し、その内側の集落も壊滅状態になった。

その堤防の上部から消滅した市街を見渡していたとき、遠方に無傷のままの立派な建物があることに気付いた。同行した友人によると集落で最大の寺院であり、それより背後の住宅もすべて無事であった。理屈で説明すれば、集落にとって重要な施設の敷地であるから慎重に選定したか、試行錯誤で現在の位置に到達したということになるが、それ以後、興味をもって各地で神社仏閣の状況を調査してみると、大半が無事であった。

仙台平野では、新聞などに紹介されて注目されるようになった「浪分神社」を訪問した。狭隘な敷地に質素な一棟の社殿があるだけの神社であるが、これは慶長地震による津波が仙台平野を遡上して、この地点で二方に分岐して後退していったことを記録するために造営されたと伝承されている神社である。今回も、神社の手前までは津波によって冠水し、田畑も建物も被災したが、神社より内陸は無事であった。

そこから海岸方向に進行していくと、海岸から五〇〇mもない水田の中央に、小高いといっても二mもない土地があり、周辺の樹木はすべて倒壊しているのに、そこだけは数本の樹木が無事で、その内側にある「狐塚神社」も無事であった。付近の下水処理施設の五階建ての鉄筋コンクリートの建物が上部まで崩壊している状態から判断すると、最低でも一〇m以上の津波が襲来したと想像されるから、不可思議な現象である。

さらに有名であるが、宮古の市街の対岸の重茂半島の姉吉の集落には、明治と昭和の津波の到達地点に、村人が後世の人々に警告する目的で建立した石碑がある。以後、姉吉では大半の住宅が石碑以上の高台に建設され、今回は無事であった。これら以外にも、三回の津波に関係して慰霊や記録の目的で建立された石碑は三陸海岸に三〇〇基近くも残存しているが、それほど関心をもたれないまま放置されてきたのが実態である。

福島第一原子力発電所の地震と津波の対策について、平安時代前期に発生した貞観地震による津波の規模を考慮するかどうか議論されているが、会議の記録によれば、貞観地震を対象とすべきという意見は少数であった。もちろん技術は費用と効果を比較して決定される性質のものであるから、条件の想定を無闇に拡大することはできないが、古代の記録といえども考慮の対象にすべきことが必要であることは明確になった。

技術は一般に前向きな性質をもつ行為であるから、神社の位置や古代の記録など過去の資料は軽視しがちであるが、それらは多数の人々や施設の犠牲によって蓄積されてきた貴重な情報である。今回の災害でも、地域に代々伝承されてきた言葉を重視して避難し、結果として無事であった人々も多数存在する。温故知新は日常生活にとっても科学技術にとっても重要な格言である。